



カツセル『理論的社會經濟學』の研究：その一, 總論([1])

高島, 佐一郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 38(4):617-644

(Issue Date)

1925-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053741>



カツセル『理論的社會經濟學』の研究

その一、總論

高 島 佐 一 郎

その一の目次

一、その社會的經濟的思想とその經濟學基本概念における特殊相。

二、狭き又た廣き意味における同書冊のフォルマア。

三、その英譯書の譯述及び表現上のフォルマア。

四、その社會經濟學の本質觀並びに經濟原論と社會政策との關係。

この主著の基礎工事としての彼れの三舊著における思想思索の發展連續……

『基本的なる一の價格理論の原理』……『勞働全收權論』……

『利子の性質とその必然性』。

五、この主著の上部工事としての彼れの二近著に現はれたる思想の發展……

『世界の貨幣問題』……『一九一四年後の貨幣及び外國爲替問題』。

大戰直前、經濟學全書の刊行企畫を中心としたる彼れとポーレと。

資本主義的經濟秩序辯護の「過激論者」としての彼れと、社會主義的

同秩序征服の「諷刺家」としてのポーレと。

一

種々な意味において省察に値ひする純理經濟學の一書が、最近極めて「讀まれやすき形ち」をとつて提供せられた。いま謂はんとする書冊は、グスタフ・カッセル著『理論的社會經濟學』の紐育版に外ならぬ。抑も同書の獨逸原本(Gustav Cassel, Theoretische Sozialökonomie, Leipzig, 1. A., 1918; 2. A., 1921; 3. A., 1923)第二版に據りて、曩きに倫敦にて刊行せられた英譯書は、

(Cassel, The Theory of Social Economy, Tr. by McCale, London, 1923, 2 vols.)その書冊の體裁形ち大さ價格など、要言すればそのフォルマにおいて、我が讀書界大方にむかひ殆んど禁止的であり、爲めに普及が妨げられたのであるが、近く紐育にて刊行されたものに至つては、(同上書名・同譯者。New York, 1924, in one volume.)それらの點、著しく面目を改めたのを見るのである。で、この機會において、同書の梗概を敍し、またその特殊相を検しようとするのが本文の目的なのである。

いま「省察」に値ひすると言ふた所以を、一二序言的に敍説し置かうと思ふ。すなはち、先づ、同書論攻の精神といふものが苟くも社會的思潮經濟學思想の推移發展といふものに思ひを沈潜する人々にとつて全般的な關心事をなしてゐるばかりでなく、次いで、その獨逸原著刊行のをりにエツデウアスが恰もマーシャルの代辯

者の如くに立ち、新正統派の根本的學說又は主觀的價值學說に向うて加へられた其の批評に對し短かけれども鋭き論争を掲げたほど然かく彼れの理論は劍橋學派はた奧太利學派に對する挑戰のすがたをなしてゐるのである。

まづ右の前者については、ヘーゲル歴史觀の導索たる思想の辨證法的展開は今さら言はずとするもゲエテの謂ゆる „Das Wissen faengt vom Einzelnen an, ist eudlos und gestaltet.“ (Aus meinem Leben.) の理義はひとり藝術とし言はず經濟學の思想はた認識に對しても同じく有效であるのに拘らず、彼れカッセルはその自から設定したる經濟學上の法則はた認識に對して絕對性・恒久性を主張せんとする意圖を明かに示してゐるのである。いま少しく之を説かうとする。彼れの目標は、小ならざる程度において、時代・意欲・思想に超越して通用する底の經濟法則を描き且つ研めんとするにある。恰も、周知せられてゐる彼れの貨幣の理論殊にその數量説及び購買力平價説が實は遠くリカルドウ説を相續したが如くに、(ケインズ風に之をいうてゐる)經濟理法全般に關はる其の精神もまたリカルドウ流の絕對主義を繼承するものゝやうに見えるのである。「經濟學の究極目的は純粹に經濟的性質をもち従うて人の意志によりては支配し變更し得られざる經濟的必然性 wirtschaftliche Notwendigkeit」を發

見するのにある」と、まづ高揚したその語のうちにも、窺はれるがやうに。——しかしながら、經濟的必然性は果して絶對性を主張し得るものであらうか、又その推移性は近代經濟生活においては、より速かに作用するものではなからうか。マーシャルの如き自然は飛躍せざる義を經濟現象にも當てはめようとする人にて、その檢した經濟理法は之を進化の流れのなかにて捉へようとしたもののなのであるし、またシドニー・ウエップの謂ふた「その制度をその社會狀態の變化に伴うて變化することにおいて現代の文明諸國は古い時代よりも迅速である」ことが今や世相の現實なのである。否、社會政策學をもつて當年マルキシズムに對抗した彼れシユモラアも、あらゆる經濟理法はその各經濟發展の階段乃至は時代において把へられねばならぬとなした點にいたつては、實質上マルクス見解の一角に同ずるものなのである。

次いでその後者、すなはち從來通用の主觀的な價值學說 Wertlehre をもつて純理經濟學を基礎付くることを拒否し、代ふるに價格學說 Preislehre を用ゐて經濟學全建築を貫くの通し柱たらしめる、要言するならば、財貨勤勞の有限不足性 Knappheit といふアプリオリの上に價格決定理論 Preisbildungstheorie を築きあげるのを純理經

濟學の本體そのものであると爲した其の立場にいたつては、實踐的に觀て一層考察に値ひするものではなからうか。けれど、かゝる考へが果して正鵠を得たものであつたなら、たいに彼れが主張した如きデエヴオンス、メンガー、マーシャル等の理論體系の「簡明化」といふものが成就さるゝばかりでなく、彼れが並々ならぬ重要性を置くところの景氣運動 *Konjunkturbewegung* の内面的檢討は、より妥當により論理的に遂行されるのであるからである。更らに視角を更へて考ふるなら、彼れは分配理論に對して大いなる重要性を認めた。けれども、その部門にて見出だされた理法には、さきに述べたがやうに先驗的な絶對性を賦與しようとする、しかも同時に、社會政策の重要權威に至つては之を然かく重視しようとするのである。さうして此の點もまた、厚生經濟學が高唱され社會政策の力調せられてゐるをりから、慥かに考察に値ひするものであらねばならぬと思ふ。

二

何れにするも、同書が、知られるのに否な省察されるのに値ひするものなることは争はれないと思はれる。けれども、私がいま、その輪廓を描き讀餘の感想を述べ

ようとしたのは、實はそが「讀まれ易き形ち」をとつて市場へ送られたのを機縁としたものであるから、姑らく、狭き意味の體裁並びに譯述乃至は表現の事共を記述するのを許されたい。

さて、狭き意味におけるフォルマアについて先づ言はう。右の英國版には、かの、スミス『國富論』のキャナン版に使用せられてゐるやうな高貴厚紙が用ゐられてゐるので分冊された第一卷が三四二頁第二卷が三一〇頁の分量に過ぎぬのに拘らず、すなはち兩冊を合算することも原著書五九六頁を超ゆること幾許でもないのに拘らず、その形ち大さは、獨逸原著書の二倍大となつてゐる。さうして、昨春獨逸ヴァルウタが安定した原著のに比較するも、その價格は二倍強を示してゐる。かやうに二倍大のしかも分冊となつてゐるからには、讀者翻讀の便宜は必然それだけ逆に減殺せられる譯であるが、今こゝに一例示するならば、第二卷末尾に附せられてゐる申譯ばかりな索引にてすら、それを利用するためには、一々、別冊を繰りひろげなければならぬ如きである。

次いで廣き意味における其れ、即ち譯述乃至表現の體裁に及ぶことゝする。譯出の體裁に至つては先づ、其の一節の長大なるところから生ずる翻讀會得の不便

を除去せんとして原著が施した用意を、無視した憾みあることを言はねばならぬ。同書はもと十九章八十二節からなつてゐるのであるが、英譯版は、そのうち僅かに第四章の第十七節を削除したほかの殆んど全部を譯述したものである。かく既に原著約六〇〇頁の龐大さが僅かに八十節ほどに別たれてゐるのであるから、一節中に説かれてゐる分量の盛り澤山なことは一見判知せられるのであつて、従うて節より節を味讀し把握してゆくには、可なりに丹念な再讀が要求せられる、これは同書の如くに節中の各項に對する欄外見出し又は標題といふものを全く缺いてゐる場合において、殊に然らざるを得ない。この不便さを緩和する爲めであらう、原著にありては、その各節は極めてしばしば適切な一行空けの形ちにて組まれてゐる、然るに譯書にては、この用意が抛棄せられた。のみならず、偶數頁には章名、奇數頁には節名を欄外に示し置いた、原著における參照に便ならしめる様式もまた全く無視せられたのである。

ついで、原著への文それよりの加除には、果して遺憾を剩ますところないであらうかの疑問がくる。この點については、原著者自から「この英譯本にありては、或る箇所にては、その解説を一層明確ならしめたいと努めたと同時に、その許さるべき

箇所にては本文を適宜截除した」と言うてゐる通り、適切な截除は、——殊に英米讀者の性癖に照らし考へては、——寧ろ恰好に愜ふるものであるべきこと疑ひを容れぬ。

けれども、それはその簡單化が妥當に行はれてゐる限りにおいて然るのであるが、この英譯には、少しく荒療治が加へられ過ぎては居らぬのであらうかと思はれる。例へば、原著第二十一節「利子學說の發展」の終り數頁の省略の如きは、その著しきものであらう。何故とやら、現實生活の領會に對しては無縁な古學說の討究をもつて價值なしとする著者平常の立場よりして、利子學說發展の一斑を窺はふとするならば、かのカノニストやマアカンテイリストらの論議を紹介するよりも、斯學界の一隅に今日尙ほ嚴然と生きてゐるボエム・バヴエルクやカール・メンガーやフィツシャアらの論叢即ち主觀說による論據を先づ掲げ、然るのちに之を撃つといふ、原著にて用ゐられた手法をもつて、遙かに意義ありとせられるのに相異ないのだからである。また例へば、原著第三十四節「近代における樂觀的勞銀學說」のはり數頁の除去も、同然たるを免かれぬであらう。何故とやら、勞銀もまた一般的價格決定行程のうちに定まる價格であり、經濟的必然性によりて定まる一價格

であるといふ、著者の見解を、強く主張すべきためには、それに反對する見解の紹介は、到底、割除せらるべきでないから、——いひかへるなら、そこに展開せられてゐる、「一の力の問題」として、als eine Machfrage 社會問題殊に勞銀問題に臨み來らんとする勞働組合運動の主張にかゝはる一切の論議といふものは、斷じて鶏肋化さるべきでないばかりでなく、そこには更らに、ウェッブ夫妻の、各職業による勞働條件の標準化といふが如き英米人には殊に興味ある提唱も取扱はれてゐるのであるからである。なほこのほか、獨逸原著の脚註に引用せられてゐる文獻又は根據にして、可なり擅まに取扱はれてゐるところもあるし、またそれが、其のまゝ舉示せられてゐても、その頁數を脱落した箇所も一二見えるのである。

三

第三に、翻譯そのものについては大凡、正鵠を得てゐるといひ得よう。けれども、獨逸文より英文への翻譯には殆んど免かれ得ぬところの生硬さといふものから、それは、免疫的であつたとはいひ得ない。『英國四季經濟學雜誌』上における其の評者フィリップは、すなはち曰ふ、「翻譯には恐らく避け難いやうな洗鍊されぬ章

句が、このマックケープ氏のにもまゝ飛び出てくるけれども、しかしそれは、まづまづ適當になされたものである。表現における誤謬がしばしばあつても、その謬りは、無智から來たものではない。けれども、出來榮之を全體としてみると、それは、經濟學上の翻譯といふものが、經濟生活の理論及び技術の細目について、もつと親炙し通曉してゐる相當な學者によつて、少くとも校閲せられねばならぬものだといふ感じを抱かしめるものがある」と。(Economic Journal, June 1924 number, pp. 235—241, esp. p. 241.)この評語は大體として

は當つてゐると思ふ。けれども、其の例證として、右評者が擧げた high conjuncture といふのに代へて industrial boom と、また reflux of bank media といふのに代へて discounting of bill といはいいかゝとなした暗示は、實は暗示自身の方が寧ろ正當でない。前の二語は同意義でないと共に、後の申出では却つて明らかに誤つてゐるのだから。

いま私は、フイリップスが Konjunkturbevegung の語は conjuncture-movement といふよりも industrial fluctuation となすを可とすとした評語を一瞥した序でに、同書最終編に現はれてゐる用語例について、二三私見を挿まねばならぬ。なるほど、英米人には、後の語の方がピッタリくるのは争ひ得ぬところであらう。けれども、アドルフ・ワグナーやシュモラーの、殊に後者の著述などにて、既に若干それに慣され來つた人

人にとつては、この語は極めて自然的に響いてくるのである。(Wagner, Grundlegung) また、マーシャルも曾つて、「この言葉は獨逸經濟學において慣用されてゐるものであるが、英國經濟學においても痛切に感ぜられるところの必要に、能く應ふるべき語なのである」といひ、そして彼れはワグナーの之に與へた定義を引用したのであるが、この場合はたゞ、その意義を擴張したものと看れば差支えないことと思ふ。

(Marshall, Principles, Bk. III. Ch vi. sec. 1.) 更に翻り考ふるなら、ピグウは同様の意味を示すのに、波狀運動 wave movement といふ語を用ゐてゐるが、かく波狀運動などといふよりも景氣運動となした方が遙かによく其の内容を表はすものだと思はれる。(Pigou, The Economics of Welfare, Pt. VI. Ch. viii.) のみならず、カッセルがその「動態經濟理論」の中心たらしめた「景氣運動」の有する特殊な意義乃至は地位を正しく且つ充分に表はすためには、この言葉は、到底、他の語にて代替せしむるを不能とする語法なのである。之を簡略に言うて置くならば、彼れがこの語に罩めしめた意想といふものは、發達した近代流通經濟生活の繼續的運動中には免かれることの能きぬ動態的行程の一本質——fluctuation といふ語に聯想せられる斷面的な外面的な現象に對比せられたものとしての繼續的な内面的な一の本質——を表はさうと試みたのに存するのであるから、いま其れを、

conjuncture といふ象徴的な一英語にて譯出するのには何らの差支えなしと信ぜられる。

従つてまた a high conjuncture と a depression と rising conjuncture と declining conjuncture と good times と bad times とを各々對比使用するのにも無理はない。さうして boom とは high conjuncture の頂きをさし、またそれは繼續的運動なれども高低のリズムを保つて隆起し來つた波頭らの破れた相たを「恐慌」crisis と呼ぶのである。譯者は斯かる含蓄をこめ、その場合場合に應じて、かなり手際よく、

conjuncture-changes, conjuncture-fluctuations, conjuncture-experience, conjuncture-profits, conjuncture-period, conjuncture-unemployment などの語を用ゐ行つてゐる。さうして第四に目立つことは、その前半の二編中に看取せられる「繰り返しの説明」の餘りにも頻出する點であらねばならぬ。これは勿論、原著者自からの表現方法がその責任の大部分を負ふべきものであるのを認めるけれども、譯者の英文乃至は表現にも、一部の責めなしとせぬやうにも思はれる。

最後に看のがされざるべき體裁上の談は、原著において、その各相當編の末尾(第一編と第三編)に、挿入せられてゐる補遺の文章が、譯書にありては、附録第一、第二として卷

末へ譲られてゐることであらう。さうして、この事こそ、會々刊行體裁における改善といふ本文の原との談義へ筆を戻さしむべき機縁として役立つ。——で、この文も此れで漸く、一つの環を元へ戻つて來た。何となれば、かゝる如きは英國版の如き二分冊にて刊行せられた場合にこそ無條件に排斥せらるべき形式なのであるが、米國版の如くに一冊ものとせられた上は、もう大した問題ではなくなつたのであるからだ。

さて、同書の形態上の及び譯出上の體裁の一斑は、凡そ右にて盡された事と思はれるが、その狭き意味におけるフォルマアすなはち龍雜として不便な而して價格の極めて不廉な、二冊ものとしての刊行様式は、すでに述べて置いたやうに、紐育版によつて改められた。かやうにして、一冊ものとせられた米國版は、頁數も組みも體裁も悉くみな英國版のと同じで、——否な皮肉にも、英國版における明白な誤植（それは勿論 Conjecture-Movement とせられねばならぬところを Conjecture-Movement と組み誤まられたる目次表）も、そのまゝにせられて、——しかも、形ち大さにいたつては、英國版の二分の一價格もまたは、二分の一となつて市場へ送り出されて來たのである。

けれども、こゝで姑らく他の一事が顧みられる必要があるかも知れぬ。と言ふのは、内容は同じにても體裁よきものが採擇せられるためしは尠くないのだから。けだし、カッセル自からの又はその友ポールの意想を藉りるなら、流通經濟の一大基調としては、職業の自由とならんで、消費選擇の自由 *Freiheit der Konsumption* が高擧せらるべきであるからである。しかし、價格の商量といふものを超えての斯かる選擇には、大凡、趣味に飽滿しようとか或ひはその他の決定事情とか、潛在してゐるのであるが、然るに、このカッセル著書の場合には、かゝる選擇の餘地がなく選擇に迷ふ餘地が剩まされてをらぬ。何故となら、全然同じものにて、しかもその爲替關係の不利にも拘らず、價格が半分なのであるからだ。もつとも、この謎は、容易くとかれる。マクミラン會社がしばしば爲すがやうに、これはたゞ、その紙型自體が太西洋を郵送せられて刷り上げられたものであらうからである。

四

右の第二、三節において私は、いかにもよい氣になつて「ライプレエリアン」みたやうな事どもを書き綴り來つたのを恐縮する。けれども、おそらく謬られたものであらうと

ころの自分の「グリユンドリヒ」な傾向の、この發現に對して斯く恐縮しながらも、すでに此の英・米版を比較閱覽せられた讀者の方々に對しては、いまわざわざ註するまでもなく、右の記述は先刻、忌避せられたであらうことを想ひつゝ、しばらく自から慰めたい。

かくて今より、同書の梗概乃至は特殊相を敘し、且つその讀後感想といふ方へ説き進む筈なのであるが、これもまた謬れる「グリユンドリヒカイト」の現れなのかも知れぬけれども、同書の理解の上にはそれにさきだつて、まだ顧みらるべき事項が二つ殘されてゐると思ふ。すなはち、その一は、既掲評者が、「社會經濟學」と銘うてる著書にして社會政策的論議を織り込まぬのは物足りない、となした批難が實は失當であるといふことであり、さうして他は、同書の生長又は成立にいたる小史一斑である。この二事、殊にその後者にいたつては、かのロバート・リフマンの大著に對して獨逸の諸評家が會つて試みたがやうに、この二十年あまり殆んど同一方向へ向うての思索の結晶である同書とさきの理解に對しては實に缺くべからざる業なりと思はれるのである。

その一については、評者の方が謬つて居る。けだし、著者がかく命名したのは、佛蘭西流の社會經濟學といふ用例に従ふたものではなく寧ろ獨逸流のそれを襲ふ

たものであるから。——いひかふれば、デイド流の意欲からではなく寧ろワグナア流のそれから之を用ゐたものであるからである。すなはち、デイドは、政治經濟學 *Economie Politique* といふときは事物が「いかに在るか」*ce qui est* を述べたものであるのに對し、社會經濟學 *Economie Sociale* といふ用例にいたつては其れが「いかに在るべきか」*ce qui doit être* 又は「いかに爲さるべきか」*ce qu'il faut faire* を研はめ論ずる社會政策 *Politique Sociale* といふのと同義である旨を確言してゐる。之に對して、ワグナア初め獨逸學者の多數にいたつては、社會經濟學 *Sozialökonomie*, *od. Sozialökonomik* といふ語は之を政治經濟學、理論經濟學又は國民經濟學 *politische Ökonomie*, *Volkswirtschaftslehre*, *od. Nationalökonomie* といふのと全く同義に解してゐる。さうして斯やうに「在るもの」を説くものに對して「在るべきもの」を考ふところの社會政策 *Sozialpolitik* については、全くその用語を一定させ、彼れ此れを辨別せしめてをるのである。然るに今のカッセルの場合は明らかに後の用語例に依據してゐるものであるから従うてかの書名の下に純理經濟學を取扱ふたにしても、それは理論上何らの不都合を生み來らぬばかりでなく立派に許さるべきである。

否な私見をもつてすれば、非難は、寧ろその反對の極にある。すなはち、著者が共

産主義的思潮を餘りにも焦燥して超克せんとしたるや、「在る」がまゝの經濟生活における分配理論を闡明することゝまらず、現存する利子、地代、賃銀にかゝる分配理論及び景氣運動の理法が亦た共產主義的社會においても依然有效なるべき旨を、ボーレ教授の如きの謂ゆるマルキシズム征服論者の口吻をもつて、その純理論中に挿さみ來つた點に横たはつてゐるのではないか、とすら思はれるのである。

（英譯書、第二卷第二六節、同第三〇節、同第三八節、及び第四卷第八〇節參照。）けれども勿論、マーシャル又はビグウの名著においても、純理論と政策觀との展開は共に、その書中、適當な場所へかたみに織り込まれてゐるのであるから、右の如きカッセルの表現方法も亦た等しく許さるべきであらう。たゞ私は、同著者の場合のそれには、政策家的な論争的精神が些か濃く露呈せられ過ぎてゐるのを憾むもののなのである。さうして彼れにして若し果して、その自から聲明してゐるがやうに、どこまでも純理論家たる埒を超えざらんとしたもののならば、同書は確たく之を純理經濟學の論攻にとゞめ、然る後ち、例へばその最近業において福田博士の採られた態度の如くに、（『經濟原論教科書』序）必ず別冊による社會政策論をもつて其れを續論し補足すべきを期し、以つて此の經濟原論と彼の社會政策論とを併せて其の經濟學の全體系を建築すべきであつたと思ふ

のである。

ついで、その二については、カッセルが彼れの二三十年に亘つた其の研究の抑も最初の業よりして既に、ひとり獨逸新歴史派から叛いたのみならず、實は自から曾つてその搖籃より立ち出でた奧太利派又は新正統派からも離脱してゐたことを實證するところの其の數種の著述自體を、瞥見しゆくのが、最も捷徑であると思はれる。

從來の純理經濟學はあまりに窮屈に且つ久しく價值論といふゴオデウスの綱に結ばれてゐる、だから、いま此の囚はれから解放するべくんば、現在通用の經濟學より價值論の全部を抹殺し、その抹消されたる「タブ・ラ・ザ」の上に新にに價格論を基調とする純理が書きおろされねばならぬ。……此れが、彼れの當初より抱いてゐた信念なのであつた。この信念の表白は一八九九年まづ、『基本的なる一の價格理論の原理』(Cassel, Grundriss einer elementaren Preislehre, Tuebingen, 1899.)等の處女論文で試みられた。このとき彼れは既に、現代經濟生活をもつて價格生活なりと看、從うて彼れがそれより新研究にいらんとした經濟生活の一大重點としての利子問題を

展開すべき前衛として、まづ、この客觀的價格理論を第一線に立たしめたのである。さうして、價格の目的使命は何であり、且つ其れはいかなる社會的必然さを有するかを可なり明確に論定した。また、このとき彼れは既に、價格決定の理論として從來の費用主義利用主義又は需給平衡主義などの考へを簡明化したと稱するところの不足稀少の主義 Prinzip der Knappheit の概念をもち出し來つたのである。けれども、デエヴォンス、カール・メンガー、マーシャルらの主觀派が全盛を極はめてゐた當年の陣營に對し、かゝる客觀派の放つた征矢の、微力であつたのは言ふを俟たぬ。恐らく彼れが等しく狙ふたロオドベルトウス、マルクスの勞働價值論に對しても、その影響はまた同然であつた。

かく價格の客觀的な決定理法を敘し其の社會的必然性を論じた彼れは、次いで、資本利子の社會的必然さを論證せんとした。否な、利子といふものが、現存社會秩序において必然的なるばかりでなく、共產主義的社會秩序にありても亦た、必然的なる所以を論じた。すなはち、この論義の展開を主目的として、彼れは一九〇〇年『勞働全收權論純理經濟學への一入門』(Cassel, Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag, Eine Einleitung in die theoretische Oekonomie, Goettingen, 1900.)を書いたのである。そこにては實に、アントン・メンガーの『勞働全收權論』における、

また資本及び利子に關するポエム、バヴェルクの二名著における見解が、共に謬られたるリカルドウ的色彩より未だ免疫せられ居らず、として斥けられた。さらに、資本從うて利子といふものは、マルクスによれば相對的、法律的範疇たるのみで、絶對的純經濟的範疇ではないとせられ、またワグナーによれば資本利子には、右の一又は他の兩方面があることせられてゐたが、このカッセルにおいては、資本從うて利子は我が經濟生活において土地及び勞働と同じく絶對的範疇に屬する、と確言せられてゐるのである。(この資本の性質については福田博士の所論參照。『國民經濟講話』第六編第三十一章)

けれども右の一書は要するに小冊子に過ぎぬものであつたが、彼れの客觀派への沈思省察が漸く深化し來つた一九〇三年、善く英文を書くその筆先きからは、今尙ほ古典的權威を保つてゐる論著が生まれ、*『利子の性質とその必然性』* (Cass, The Nature and Necessity of Interest, London, 1903) がそれである。それにて彼れは、古代にてはその哲學的方面が、中世にてはその倫理的意義が、さうして初近世にてはその政治的方面が、高揚せられた、この利子の問題といふものは、今や重大なる社會的分配の問題となり、經濟生活はた價格生活の中心問題をなすに至つたとなし、以つてその六年間の思索を傾けつゝ有らゆる方面よりして資本利子の理論を攻めたのである。すなはち、物價

の側より、待望に對する需要及び待望の供給の點より、貨幣と利子との間に存在する關係よりして之を詳論し、をはりに、規律的な經濟生活を營まんとする限り、利子がいかなる社會秩序、經濟組織のもとにも必然的な所以を論定したのである。さうして掲げられた中心思想は言ふまでもなく、利子が物價一般と同じく、資本に對する需要及びその供給によりて定まる價格であつて、その決定要因はその有限不足性に横たはるゝとなすものである。かくて彼れが、この同じき理義を、勞銀の決定理法にも及ぼし來たるべきことは、吾々の容易く推測し得るところであらねばならぬ。

五

その後とても最近の約二十年間、カッセルは經濟生活における殆んど有らゆる靜態的及び動態的問題をば、有限不足性の考へを中心とした一の「價格決定の問題」として、als Probleme der Preisbildung 之を還元し考察した大小多數の論策を、公けにしつゝあつた。が、つひに一九一四年までに、その一流の論法即ち價格構成理論の上に建築せられた純理經濟學の一卷の全稿本、言ひかふれば實質上、本文の主題をな

す同書の全稿本が完成されたのだ、と彼れは、同書獨逸原著における序文中で言うてゐる。

この小史の敘述は、もう少し之を續かしめねばならぬ。彼れはもともと獨逸にて學び、また倫敦大學經濟政治學校にてしばしば講演を試みたほかに諸外國語に堪能な人ではあるけれども、右の純理經濟學書の刊行に當つては、豫め、その盟友なるライプチツヒのポーレ教授と協勞するところがあつたのである。すなはち、その獨逸原著序文中に言うてゐるところによれば、その友が經濟生活の發展史的社會學的部門を擔當したのに對して、彼れは理論經濟學的部門を擔當し、以つて會々世界戰爭の發生したその前後に當つて全一的な國民經濟學書を刊行すべきことを企てゝゐたのである。(Theoretische Sozialökonomie, Vorwort zur I. Aufl. iv.) 勿論、變局の壓迫の生ずるあつて爲めに、その出版は一九一八年末まで延期せしめられた。けれども、右の延期は、カッセルの學問的發表にとつては無用ではなかつた。何故とやら、しばらく彼れの所言に従へば、大戰爭の經驗は、變局のためにせられる其の理論の動搖變更といふものが殆んど絶無であつたのを教へたけれども、しかしその經驗によつて啓示せられた一對の新事實は、之を二つの補遺文たらしめたのであるからである。今謂

ふた、その一つは、物財殊に日常消費資料の國家的強制配給の組織運用に關するものであり、その二は、貨幣の數量説及び此れを對外價值決定の考察にまで擴充せしめた謂はゆる購買力平價説を敘述したものである。（及び一二の展開し置いた理論體系の經驗のために動搖變更を受けなかつた、と言ふ如き言説は、他の諸家も例へばゲイドも、その理論中で掲げてゐるところなのである。けれども、ゲイドはカッセルの態度と異となりて、其れに基づいて若干の修正）さて變局の經驗が無用でなかつたことは、カッセルをして、右の補遺文の挿入のみにはとゞまらしめず、更らに有力な二文獻を產出せしめた。すなはち、その補遺の後者にいたつては、發展し詳化せられて、先づ『世界の貨幣問題』（Cassel, Memorandum on the World's Monetary Problems, 2 memoranda, London, 1921.）と名づけられた國際聯盟理事會への有力な報告となり、次いで『一九一四年後の貨幣及び外國爲替問題』（Cassel, Money and Foreign Exchange）の刊行となつたものであり、さうして殊に、後の一書もて示された彼れの論策的優越さは、少くとも英米の關する限り、今や彼れをケインズ及びホオトレイと比肩する底の時論上の權威たらしめたのである。

上に記述し來れるところによりて、吾人は、カッセルの『理論的社會經濟學』の

一書が、その論攻の精神と理論の構造とにおいて、決して其の成れる日に成れるものではなく、二三十年に互る同一方向に向うての思索の結晶であり綜合であつたのを知り得らるゝことと思ふ。しばらくそれらの固有する業績の優劣といふものから離れて、他にその比較を求めたならば、それは宛がら、ケインズの十餘年前の舊著『印度の通貨及び金融』が其のまゝ、近時の輝しき論策『貨幣改革論』の基礎となり、マーシャルの二十年前の名著『經濟學原論』の理論的な心が其のまゝ、近く『産業と貿易』の現實的な形ちに現はれたのにも等しい。否な、同じく獨逸系統の學究にして、輓近の社會問題に對して殆んど同一立場をとる人々の間に、若し其の比較を求めたならば、それは實に、ロバート・リーフマンの思想發展の跡に酷似するのを見いださざるを得ない。すなはち、リーフマンの近大著『國民經濟學原論』及び近小著『社會主義の歴史及び批判』こそは、一見、その數舊著書と論態を異にするものゝ如くにも見ゆれ、實はその二十餘年前より次ぎ次ぎに刊行せられた『持株及び金融會社』や『カルテレ及びトラスト』や『企業形態論』などにおいて悉く、その思索、思想的傾向の先蹤をば發見するのである。かくして今、吾々の當面する此のカッセルの純理經濟學書もまた、確たく信ぜられ注意深く企

畫せられた設計に従ひ、一つ一つ築き來つた石垣の上へ建てられた伽藍なのである。丹念に組み立てられた思想上のバベルの塔なのである。かゝる堂と塔の内面的理解をば専らその目的としたればこそ、私はかゝる迂回的筆路を辿り來つてしまふのだ。たゞ、この道草を摘み歩いたの、甚しいものあるけれども、今進みいる花園の内容そのもの、鑑賞に至つては、それがため却つて、より有效に行はれるのを望むものである。

さて、かくも丹誠して生長せしめられ來つた同書の結構こそはまた、それ自體すでに、その思想内容の一斑を暗示してゐるものゝやうに思ふ。全卷は四編に別たれてゐる。すなはち、(一)國民經濟の一斑的觀察、(二)生産要素の價格決定、(三)貨幣及び購買力、(四)景氣運動の理論、此れである。その一にては流通經濟を支配する根本組織及び原則を、その二にては流通行程において成立したる價格がその價格構成參加要素間へいかやうに分配せらるべきかの主義理法を、その三にては流通經濟の心臟たる貨幣の機能及びその購買力決定の理法を論じ、をばりに流通經濟生活てゐる繼續的行程における不可避の韻律たる景氣不景氣運動の内面的性質を究明するのである。いま一語、その研究方法における特殊相を素描しおかうな

ら、前三編が極めて抽象的な命題よりして演繹的に論下されてゐるのに對し、最終編にありては、あまたの統計資料及び圖表を用ゐ極めて現實的に或る理法へ溯論しいつてゐるのにおいて、まづ好箇の對象を示してゐる。ついで姑らくバツテン、クラーク、マーシャル、シユウンペエタアラの曩きに強調した或る辨別法に従ふなら、前三編が凡そ靜態經濟理論を展べてゐるのに對し、最終編はまさしく動態經濟理論を爲すものなるにおいても亦た好對象を内在してをる。更らに、讀者諸卿自から直ちに看取せらるべきがやうに、同書にあつては少くとも表面上、かのセイに始まりステュアート・ミルに完成せしめられた經濟學の三乃至四編別法といふ傳統は、明確に棄てられてゐる。で、全卷を通じて——おそらく最終編を除いては——少くとも外見上、分配理法の闡明が重心を形ちづくつてゐるのである。

けれども、かゝる分配論の強調といふものが、ミルの分配論力説の精神とは反對な、さうしてマルクスとは全く正反對な、動機認識・信念から來てゐるものであることは、上來の記述一斑よりして容易く看取せられることであらうし、さうして興味あることでもある。説くまでもなく、彼れはマルクスとは正反對な意味においての「過激論者」^{ラディカリスト}なのである。かゝる如きは當然、次號(本論)にてその全體系を展望し

をはつた後ちに行はるべき業なのであるが、私はこゝに重ねて、彼れが資本主義的經濟學辯護における過激論者である旨を一語してをきたい。いま、ラディカリストと言ふた此の機會において、現代獨逸經濟學者中、この意味において同著者と同一陣營に屯し、しかも同書成立に向うて異常な協勞をなしたその人の仕事を顧み以つて此の序論を結ぶのを、表現上、望ましき方法であると思ふ。

その人とは勿論、ポール教授を指すのであるが、彼れは、一九一〇年ごろカッセルと約したがやうに、これも既述して置いた「發展史的社會學的な經濟學部門の著作を遂げ、以つてその歴史事實をもつて、カッセルの理論體系を裏づけるところがあつたか？然り、部分的には其れは成就されたといひ得られる。何故となら、其の著『第十九世紀における獨逸國民經濟生活の發展』(L. Pöhl, Die Entwicklung des deutschen Wirtschaftslebens im letzten Jahrhundert A. N. u. G. 57. Band, Leipzig 5. A., 1922.)は、小冊子ながらも確かに名作と稱へらるべきものであるばかりでなく、このカッセル理論經濟學の最終編、景氣運動の理論の理解に對しては、尠なからず寄與すべき記述を含んでをるからである。たゞ憾むらくは、獨逸國民の當面しつゝあつた難局が、ポールに對して其の戰前に期待してゐた如き大作刊行の餘裕を與へなかつた事であらねばならぬ。いま短く彼れの言葉で此れを表はさう。

その小著『資本主義と社會主義』の第三版序文中にて、彼れは言ふ、「精神的活動をなす人は諷刺家となるか、はたまた過激論者となるか、そのいづれかの一つである、とはトーマス・マンが曾つて其の著『一非政治家の考察』の中で書いてゐる言葉である……注意深い讀者は、この著書における著者が第一の範疇に即ち諷刺家の部類に屬するものであることを直ちに感得するであらう」。(L. Pohle, Kapitalismus und Sozialismus, Leipzig, 3. Aufl., 1920, Vorwort v.) 然り、少くとも今日までのところでは彼れは諷刺家としての著作におゐて、「社會主義の一征服者」, „ein Ueberwinder des Sozialismus“ となつてゐるのに過ぎぬ。このとき、その協勞者カッセルに至つては、身幸ひに中立國に生れ思想上のプロファイティアラアとして靜かに深く思索を廻らし得、爲めに、より大きな理論經濟學といふ體系に據り、堂々と過激論者の論陣を布きて、同じく社會主義の征服者たらんとしてゐる。彼れ果して眞に力ある中世騎士であつたか。はたドン・キホーテであつたか。これもまた、其の純理の省察は姑らく之を措くとするも、なほ彼れの業績研究において、興味を繋がりしむる一事たるを失はぬのである。

(未完)